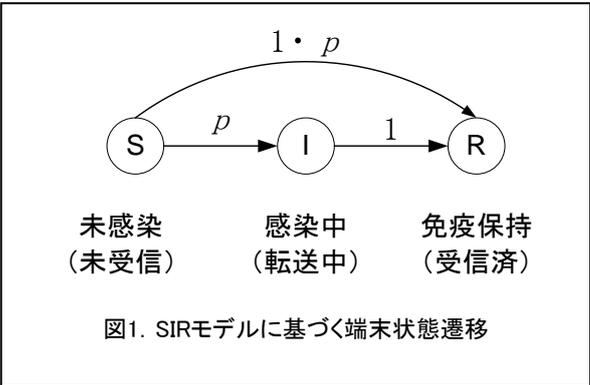


申請者	学科名	情報通信工学科	職名	教授	氏名	榊原 勝己
調査研究課題	感染症数理モデルを用いた無線LANマルチホップ放送型情報配送方式の最適設計					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	榊原 勝己	情報工学部・情報通信工学科・教授	通信・ネットワーク工学	研究の総括, アルゴリズム設計, 理論解析	
調査研究組織	分担者	武次 潤平	情報工学部・情報通信工学科・助教	通信・ネットワーク工学	計算機シミュレータ構築, 実装実験 プログラミング, データ整理, 成果発表	
		李 善鏞	大学院学生			
		原田 拓弥	大学院学生			
		藤野 貴志	大学院学生			
		磯野 竜太郎	大学院学生			
		堀内 貴行	大学院学生			
松本 康祐	大学院学生					
調査研究実績の概要	<p>ネットワーク上の全ての端末に同じ情報を送信する放送型情報配送方式は、無線LAN端末を用いたアドホックネットワーク等で使われている。一般的な放送型情報配送方式では、情報パケットを受信した全ての端末が通信可能な範囲へ中継転送を行う“フラディング”と呼ばれる手法が用いられている。本研究では、感染症モデルを用いて、確率的に転送を行う確率的フラディングにおける情報の到達率に関して前年度までに構築したモデルに、無線LAN等で利用されている情報パケットの衝突を回避するためのランダム・バックオフ遅延を考慮した状況への拡張を図り、その精度を計算機シミュレーションにより評価した。</p> <p>感染症モデルの1つであるSIRモデルでは、人口は未感染(状態S)、感染中(状態I)、免疫保持(状態R)に分類される。時刻 <math>t</math> における各状態の人数を <math>S(t)</math>, <math>I(t)</math>, <math>R(t)</math> とすれば、これらに関する微分方程式を解くことによって、各々の時間推移を知ることができる。ブロードキャスト通信における端末状態を、未受信(状態S)、中継中(状態I)、受信済(状態R)に分類すれば、SIRモデルと対応付けることができる。ネットワーク内の端末密度を <math>\sigma</math>, 転送確率を <math>p</math>, 第 <math>t</math> ホップで中継端末の存在する伝播面積を <math>A(t)</math> とする。このとき、端末の状態遷移は図1のようになり、ある種の差分方程式を満たす。</p>					



調査研究実績  
の概要

全端末数を  $N$  とし, 初期状態を  $S(0) = N - 1, I(0) = 1, R(0) = 0$  とする. 1辺  $L$  の正方形をネットワーク範囲とし, 各端末の送信距離を1とする. 情報発信端末を範囲の中央に配置し, 残りの  $N - 1$  個の端末をランダムに配置する. パケットが環状に伝搬すると仮定し, 状態  $I$  端末が存在する環と正方形の重なりとして伝播面積  $A(t)$  を求める. この際には, 環状での伝搬を想定し, 端末密度  $\sigma$  および転送確率  $p$  により定義される関数を用いた基準距離の概念を導入する. さらに, 前年度までは除外していたランダム・バックオフ遅延を考慮した上で, 計算機シミュレーションを行い, 構築した差分方程式によるモデルに含まれるパラメータの補正を行った.

端末数を  $N = 1,000$  (端末密度  $\sigma = 2.5$ ) に対する情報の到達率を図2に示す. 従来のモデルでは, 十分な精度を得ることができないが, 補正をかけたモデルでは, 計算機シミュレーションによる結果と翌一致していることは明らかである. また, ホップ数と到達時間の関係を図3に示す.

今回は, 情報の到達率をホップ数の関数として評価したが, 時間の関数として評価することにより, より現実的なものとなる. また, 今回用いた補正法により, 十分な精度を得ることができる適応領域を調査することも必要である. これらの課題に関しては, 次年度以降に引き続き検討を行う.

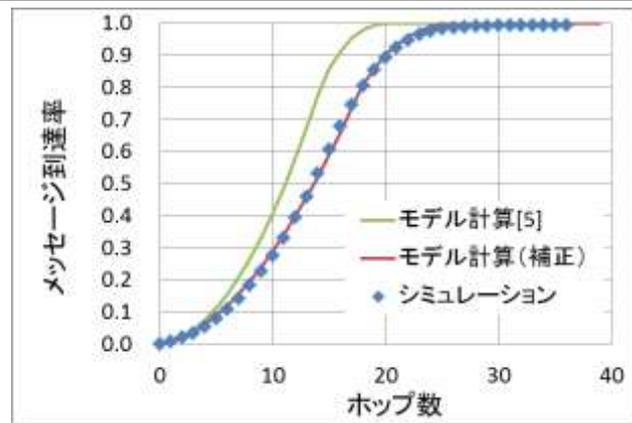


図2. メッセージ到達率(端末数  $N = 1,000$ , 端末密度  $\sigma = 2.5$ )

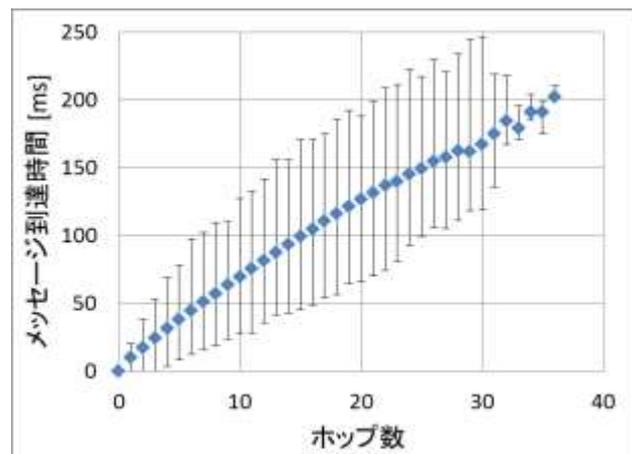


図3. ホップ数と到達時間の関係(端末数  $N = 1,000$ , 端末密度  $\sigma = 2.5$ )

成果資料目録

- [1] 榊原勝己, 原田拓弥, 武次潤平, "Performance approximation of persistent relay CSMA with carry-over of backoff counter freezing after collision," WSEAS Transactions on Communications, vol.14, Article ID 1, pp.1-10, 2015年.
- [2] 榊原勝己, 武次潤平, "Performance analysis of network coding-based cooperative ARQ with carry-over of backoff counter freezing after collision," in Proceedings of the 13th International Conference on Data Networks, Communications, Computers (DNCOCO2015), Budapest, Hungary, pp.23-32, 2015年12月.
- [3] 堀内貴行, 榊原勝己, 武次潤平, "コグニティブ無線におけるセカンダリユーザの期限付ブロードキャスト伝送に関する検討," 平成27年度(第66回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, 宇部, no.9-11, pp.89-90, 2015年10月.
- [4] 藤野貴志, 榊原勝己, 武次潤平, "Framed Slotted-ALOHAを用いたデータ収集プロトコルの提案と性能評価" 平成27年度(第66回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, 宇部, no.9-10, pp.87-88, 2015年10月.